

書評と紹介

金孝淳著／石坂浩一監訳

『祖国が棄てた人びと』

—— 在日韓国人留学生
スパイ事件の記録』



評者：高柳 俊男

評者が大学に入ったのは、今から40年以上前の1970年代半ばだった。

そのころの韓国といえば、朴正熙大統領による軍事独裁政権の時代で、強権をほしいままにする独裁政権と、それに抵抗する学生やキリスト者らによる民主化運動が対峙する国として、韓国の動向は日々報じられていた。日本でも韓国民主化運動への連帯運動が沸き起こり、「金芝河を救え」「金大中を殺すな」といったスローガンが広く流布した。現在とは違って韓流ブームなどももちろんなく、韓国に出かけるのはビジネスマンの男性で、「妓生観光」として一部で批判もされた。

大学生の私自身も、韓国民主化運動に連帯する集会にしばしば足を運んだ。また、NHKはおろか、大学ですら「朝鮮語」（総称）を学ぶ機会がごく限られていた中で、知り合いの在日朝鮮人に頼んで朝鮮語の初歩を学んだことを懐かしく思い出す。当時、韓国や朝鮮に関心を寄せることは、単に隣国を知るというよりは、侵略や差別の張本人たる日本の歴史を見つめ直し、自己変革を迫るものとしてあった。

そうした時代にしばしば直面したのが、在日韓国人政治犯の存在である。祖国である韓国に留学や商用で訪れた際に逮捕され、北のスパイなどとして長期間にわたって収監された人々である。日本には、個別の救援組織のほか、「在日韓国人政治犯を救援する家族・僑胞の会」（金泰明事務局長）と「在日韓国人『政治犯』を支援する会全国会議」（吉松繁事務局長）の二大組織ができ、私とともに韓国・朝鮮について学ぶ仲間の中にも、政治犯支援活動を長く続ける日本人や政治犯の家族自身がいた。家族たちは、支持者らによる粘り強い支援を受けながらも、囚われの本人がいつ出獄できるかわからない絶望感や、もしかして殺されてしまうかもしれない不安感に常に苛まれ、苦難の闘いを続けていた。韓国では政府はもちろん、言論統制下にあったマスコミからも、当時は「アカ」（パルゲンイ）呼ばわりされたり無視されたりして、正当な理解が得られなかった。まさに祖国から見捨てられた人々であった。

本書は、そうした人々、とくに在日韓国人留学生のスパイ事件に光を当て、民主化された現在の韓国における真相究明や名誉回復の成果を記録したもので、2015年に出版された原著の翻訳である。再審裁判を担当した弁護士からの資料提供を受けて、『ハンギョレ新聞』東京特派員を務め、日本の状況や在日韓国人の立場も熟知しているジャーナリストにより執筆された。韓国では近年、従来隠されたり、歪曲されてきた歴史への見直しが急速に進んでいるが、これもこうした過去の歴史への再評価作業の一環と位置づけることができる。在日韓国人政治犯の問題に従来顔を背けてきた韓国社会のいわば自

己批判の書で、その意味でまさに画期的と言える。「はじめに」にある以下の部分が、本書刊行の趣旨を端的に表現している。「韓国社会は、希望を求めて母国に渡ったのに冷たく捨てられた在日韓国人政治犯犠牲者たちに、温かい手をさしのべたことがない。本書が、その人たちの受難の背景を理解し、在日韓国人問題について社会的関心を高める一助になればと願う。」こうした活動が本年6月、大阪での文在寅大統領の在日韓国人政治犯への謝罪発言にもつながったものと理解される。

目次を見ると、全12章に分けられている。第1章では、歴史家の朴慶植、芥川賞作家の李恢成、韓国籍のまま日本の弁護士になった金敬得などの著名人の事例を引きながら、1970年代当時の在日韓国人が置かれた政治・社会的状況を説き起こしている。次章からが個別の人物や事件に当てられ、マルクス主義経済学を学んだ金元重(第2章)、前史としての進歩党事件と民族日報事件(第3章)、再審による無罪宣告第一号となった李宗樹(第4章)、「赤化防止」の観点から連携してでっち上げを支えた日韓の右翼(第5章)、韓民統、すなわち韓国民主回復統一促進国民会議(第6章)、中央情報部(KCIA)の民団への介入とそれに連動した民団の内紛(第7章)、もっとも知られた在日韓国人政治犯である徐勝・徐俊植事件(第8章)、死刑判決を受けた姜宗憲や李哲ら(第9章)、鬱陵島事件の首謀者とされ、自ら日韓国人政治犯全般の救援運動に尽力した李佐永(第10章)と続く。

在日韓国人留学生たちは、たとえ語学が不十分であっても、共産党が合法化され朝鮮総連もある日本から、民族的なものを求めて母国にやって来たわけだが、そうした国情の違いや警戒心の低さ、個人の意欲が取り調べの過程でことごとく悪用されたことが、これらの章で繰り返

返し語られる。自白を得るため肉体的な拷問が日常的に行われ、刑の確定後は親子の情に訴えるなどして転向が強要されたり、刑期満了後も保安監護処分と称して収監が継続された。治安要員が自らの「成績」を上げるため、事件のシナリオを針小棒大に作り上げていく構図は、戦前の特高警察などと変わらない。どうしても酷薄な内容が多くなりがちだが、単に事件の概要を紹介するにとどまらず、政治犯とされた個人の生い立ちや受けた教育、その中での生き方をめぐる葛藤や人間性などを丹念に記述し、顔の見える生身の存在として提示しようと努める著者の姿勢が注目を引く。

同様に、血の通った人間の物語として描こうという志向は、救援活動を通じた日韓の出会いを扱った第11章や、日本人活動家の横顔を綴った第12章にも貫かれている。ここでは、自国の責任をも見据えて取り組む前掲の吉松繁牧師はじめ、富山妙子、三木睦子らの著名人のみならず、救援活動への参加がその後の人生の歩みすら変えた、より無名の庶民までもが取り上げられている。在日韓国人留学生の逮捕投獄というマイナスの歴史を通して、両国の心ある人々が接触を持ち、連携や連帯が築かれていく。日本での救援活動が収監者たちにとって心の支えになったことは、他の章でも言及がある。まさに民族の違いを越えた人間としての共感に、思わず心が和む。この部分は、李美淑の労作『「日韓連帯運動」の時代——1970-80年代のトランスナショナルな公共圏とメディア』(東京大学出版会、2018年)と合わせて参照されるべきであろう。

一方で、本書を読み終えて、ある疑問も脳裏をかすめる。すなわち、本書では韓国の独裁政権による抑圧・捏造が、在日韓国人政治犯を生んだ元凶だという側面が強調されているが、す

べて事実無根で、ことごとくでっち上げやこじつけなのだろうかという問いである。一般化すれば、ある時代につくられた誤った認識を糾す際、Aに対してノットAをまずは強調することになるが、はたしてそれだけでいいのかという課題でもある。実際には、北朝鮮の路線のもとで朝鮮半島が統一されることが正しいと信じて意識的に工作活動に携わったり、状況に巻き込まれてやむなくスパイ活動に与したケースも含まれているのではなかろうか。

というのは、評者は数年前、自伝的な内容も含む尹健次の大著『「在日」の精神史』（全3冊、岩波書店、2015年）に対して、長めの書評「自分がそこにいる歴史を綴る使命と責任」（『抗路』第2号、2015年9月）を書いた。そこでは、尹健次自身がかつて朝鮮労働党の在日地下組織に在籍し、その指令を受けて密航船で北朝鮮に渡り、軍事訓練も含むスパイ教育を受けてから韓国に潜入した事実を、自ら公表している。尹は渡韓後、韓国民衆には北の革命路線を受け入れるような素地はなく、また言葉の問題を含め、すでに異質となった在日の自分が韓国で運動を背後操縦できる可能性などないと痛感、結果的にスパイとして摘発されることはなかった。しかし、尹健次と言えば戦後在日朝鮮人の著名な論客で、雑誌『世界』などにしばしば論考を発表、岩波書店から単行本として多数刊行している。そうした在日を代表するオピニオンリーダーが北朝鮮のスパイ活動に関わっていた事実や、意を決してその事実を自ら告白した行為には、実に重たいものがある。尹健次は、同じく北に渡航した末に韓国で捕まり、在日韓国人政治犯の代表格となった徐勝に対して、当時抱いた革命思想や信念をいま自らどう総括し、北の独裁政権下の民衆にどう対するのか、と同書で問いかけてもいる。

あるいは、在日朝鮮人文学の中でももっとも

重要な作家の一人と目される金鶴泳の最後の単行本『郷愁は終り、そしてわれらは―』（新潮社、1983年）が、関連して思い出される。ここで金鶴泳は「沢本事件」という、植民地時代に朝鮮北部に生まれ、のちに日本に帰化した朝鮮人が、生き別れた親族に会いたい一心から北朝鮮に渡り、当局と関係を持ったことで北のスパイとされ、韓国に摘発された事件（沢本事件を考える会編『あるレポート——もう一つの「金大中事件」』参照）をもとに、物語を構想している。作品執筆の背景には、韓国側からの働きかけがあったことが公表されている金鶴泳日記からわかる。ただし、その素材に飛びついたのは、単にスランプからの打開のみならず、きょうだいが北朝鮮帰国事業で実際に北に渡るなど、作家自身が南北の分断状況とその中で引き裂かれた生に対して強い関心を抱いていたからこそであろう。取材とはいえ、大田矯導所まで行って、収監中の沢本三次本人に面会してもいる。

以上、2つの事例だけからみても、在日韓国人政治犯の問題には複雑な要素が絡んでいることがみてとれる。つまり、南北両政権が激しく対立し、それぞれが自己の正統性や優越を誇示し、相手を貶め転覆すら企てる現実政治の中では、双方が相手側にスパイを送り込んで、熾烈な情報戦を展開する日常が存在するのである。韓国から北朝鮮へのスパイ活動は、今年日本で公開された、実話に基づく韓国映画『工作』からもその一端が垣間見える。こうした相互偵察活動の中に本書を置くと、これがあくまでも歴史の一断面を切り取ったものであり、在日韓国人政治犯の問題全般を客観的かつ多面的にどう描き出すかという課題は、読者の側に委ねられていると言えるかもしれない。軍事独裁政権時代の暗黒面に果敢に切り込んだ本書をもとにしつつ、逆の一面化を排し、より普遍的で後の時

代にも通用する歴史像をどう形づくるべきかについて、ともに考えていく必要があるのではなからうか。

ちなみに、評者自身は、南の軍事独裁政権の悪に比して、北の軍事独裁政権の悪がより小さいとは考えていない。本書は、民族的アイデンティティーの確立や母国語習得などを志して南に渡った留学生たちが無残にも犠牲になる話だが、同様に祖国を希求して夢破れた人の悲劇は北にも無数にある。たとえば、1959年からの北朝鮮帰国事業で帰国した後に、体制に有害だとして強制的に隔離されたり、消息不明になったもと在日朝鮮人が、いったいどれだけの数に上るのか。韓国の場合は、政治犯一人一人に日本で救援組織がつくられたが、そのようなことは夢のまた夢で、それこそ「スパイ」や異端分子として粛清され、闇に葬られたまま現在に至っている人が少なからず存在すると思われる。在日韓国・朝鮮人にとってもともと祖先の出身地で墳墓の地である南とは異なり、元来は無縁で、政治的な文脈の中で「祖国」と喧伝された

北への渡航には、人為的な要素がはるかに多い。「帰国」という名の移住で北朝鮮に将来を託した在日朝鮮人に対する人権抑圧の実態についても、いずれまっとうな光が当てられ、「祖国が棄てた人びと」北朝鮮版の出版や、その抑圧構造に日本がどう絡んでいるかなどの解明が、よりいっそうなされねばなるまい。

その過程で、本書にまた新たな位置づけがなされる日が来ることもありえよう。本書を読んで感じた疑問は疑問として今後とも念頭に置きつつ、軍事独裁政権時代の自国の不義の歴史にメスを入れ、スパイとされたもと在日韓国人留学生個人々々人を復権する労作を著した金孝淳や、石坂浩一をはじめとする訳者各位に、まずは敬意を表したい。(文中敬称略)

(金孝淳著／石坂浩一監訳『祖国が棄てた人びと——在日韓国人留学生スパイ事件の記録』明石書店、2018年11月、399頁、定価3,600円＋税)

(たかやなぎ・としお 法政大学国際文化学部教授)